

映画で考える 多様性と共生 / 第5回

『最強のふたり』授業ガイド

障害と介助、対等な関係——「『かわいそう』より、『いっしょに』。」

教員用・指導資料（対象：中学生以上）

📄 本資料はAI（Claude / Anthropic）で作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家の監修ではありません。授業での使用可否・場面の選択・学年の適否は、担当の先生が最終判断してください。

1 授業の概要

テーマ	障害と介助、対等な関係（「同情」ではなく、一人の人として向き合う）
教材映画	『最強のふたり』（原題 Intouchables／2011年・フランス／監督・脚本：エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ）
対象	中学生以上。日本ではPG12（大麻を吸う場面、下品な冗談・言葉づかいを含む）
時間	標準100分（50分×2）。上映113分。場面を選んだ部分視聴を基本に
中心概念	同情と思いやり／介助する人・される人の対等な関係／障害以外の「壁」（生まれ育ち・格差）／実話と映画
ねらい	障害のある人との関係を「してあげる／してもらう」だけでなく、おたがいに影響し合う対等な関係としてとらえ直す
準備物	生徒用ワークシート（別PDF）／筆記用具

2 内容への配慮（必ずお読みください）

⚠️ PG12作品・障害と笑いの扱い（重要）

日本でPG12の作品です。大麻を吸う場面や、下品な冗談・言葉づかいを含むため、上映する場面を選んでください。

- 上映は場面を厳選する（面接の場面、二人の関係が変わっていく場面など）。
- 障害のある生徒や、家族の介護にかかわる生徒がいる可能性に配慮する。
- 二人の冗談は「対等な関係だからこそ生まれる笑い」であり、障害を笑いの対象にしてよいという意味ではないことを補足する。
- 実話をもとにしているが、映画としての脚色があることを伝える。

📄 レイティング・著作権について

- 日本ではPG12（12歳未満は保護者の助言・指導が必要）。配信版・ソフトの表示もご確認ください。
- 授業での上映には教育機関向けの権利処理が必要になる場合があります。本教材の文章はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。

3 「同情しない」関係（予備知識）

なぜドリスだったのか

事故で首から下がまひした大富豪フィリップは、介護の経験もない若者ドリスを住みこみの介護人を選びます。ドリスは、フィリップを「障害者」としてではなく、一人の大人として接しました。特別あつかいしない、遠慮しない態度が、フィリップにとっては新鮮だったのです。

もう一つの「壁」

パリの豪邸で暮らすフィリップと、郊外の団地で育ち仕事を見つけるのに苦労するドリス。この映画には、障害だけでなく住む場所や生まれ育ちによる「壁」も描かれています。ふだんは交わらない二人が出会ったことで、おたがいの見方が変わっていきます。

💡 「同情」と「思いやり」のちがいは

「かわいそう」という同情は、ときに相手を「下」に見ることに繋がります。一方、思いやりは相手を対等な一人の人として尊重することから始まります。この区別を授業の軸にすると、福祉・介護の学習や職場体験の事前学習にもつながられます。

対等な関係をつくる4つの視点（板書用）（板書用）

① 特別あつかいしない

障害ではなく、その人自身を見る。

② 本人の意思を大切にする

何をしたいか、どうしてほしいかを本人に聞く。

③ おたがいに学び合う

介助は「してあげる」だけの一方通行ではない。

④ ちがう世界を知る

生まれ育ちのちがう人と出会うことで、見方が広がる。

🎯 この授業の到達目標

「同情」と「思いやり」のちがいを説明でき、障害のある人との対等な関係に必要なことを、映画の場面を根拠に挙げられる。

4 100分授業の流れ（50分×2）

時間	ながれ	先生の動き・発問
0-10分	導入	「かわいそう」と「大切にする」は同じ？ ちがう？ と問いかける。
10-20分	作品紹介	実話であることと、PG12作品であることの配慮を伝える。
20-48分	映画を観る①	面接の場面、ドリスが働き始める場面（厳選クリップ）。
50-72分	映画を観る②	二人が遠慮なく話し合う場面、関係が深まる場面（厳選クリップ）。
72-90分	ワーク記入	「対等な関係をつくる4つの視点」をもとに考える。
90-100分	共有・まとめ	板書『『かわいそう』より、『いっしょに。』』で締める。

🌱 まとめ

介助する人とされる人は、「してあげる／してもらう」だけの関係ではありません。おたがいに影響をあたえ合う対等な人間どうしの関係になれることを、この映画は描いています。福祉や介護を「特別なこと」ではなく、人と人との関わりとして考えるきっかけにしてください。

5 映画の背景知識

原題／邦題	Intouchables／最強のふたり
製作年・国	2011年・フランス。上映113分。日本公開：2012年。日本ではPG12
監督・脚本	エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ
受賞	第24回東京国際映画祭 東京サクラグランプリ・最優秀男優賞、日本アカデミー賞 最優秀外国作品賞
実話	実業家フィリップ・ポッツォ・ディ・ボルゴと、その介護人との実話がもと。映画の最後に実在の二人も映る

主なキャストと役柄

- ・ **フランソワ・クリュゼ**（フィリップ役）：首から下が動かない役を、表情と声で豊かに演じた。
- ・ **オマール・シー**（ドリス役）：明るくまっすぐな若者。東京国際映画祭でクリュゼとともに最優秀男優賞。

題名の意味

原題の“Intouchables”は、フランス語で「触れられない人たち」という意味。社会の中で、ふだんは交わることのない二人を表しているとも言われます。アメリカなどでリメイク版もつくられました。

※上記の事実は公開情報（映画.com、東京国際映画祭公式サイト等）をもとにしています。細部・脚色には諸説あるため、授業前に必要に応じてご確認ください。

6 発問例・見取りのポイント

Q. フィリップは、なぜ経験のないドリスを選んだのだろう？

→ 「同情の目で見ない」ことの意味に注目させる。

Q. 「同情」と「思いやり」は、どちらがうのだろう？

→ 相手を下に見るか、対等に尊重するか。身近な例で考えさせる。

Q. 介助する人・される人が「対等」でいるために、大切なことは？

→ 本人の意思の尊重、おたがいに学ぶ姿勢など。福祉の学習につなげる。

ワークシートの見取り（評価の観点）

- ・ 「同情」と「思いやり」のちがいを、自分の言葉で説明できているか。
- ・ 対等な関係に必要なことを、映画の場面を根拠に挙げられているか。
- ・ 障害を笑いの対象にする表現になっていないか。
- ・ 意見の発表は強制せず、書いた内容を尊重する。特定の子どもに注目が集まらないよう配慮する。

7 シリーズ全体像

回	映画	テーマ	目安
1	ワンダー 君は太陽	見た目のちがいと友だち	小学校高学年～
2	映画 聲の形	いじめと、向き合うこと	中学生～
3	ズートピア	偏見とステレオタイプ	小学生～
4	ドリーム	人種と性別の壁を越える	小学校高学年～
5	最強のふたり	障害と介助、対等な関係	中学生～
6	グリーンブック	差別と旅、友情	中学生～
7	リトル・ダンサー	「らしさ」の思い込み	小学校高学年～
8	パディントン	よそ者を受け入れる社会	小学生～

8 参考資料（主な出典）

最強のふたり 作品情報（映画.com） <https://eiga.com/>

第24回東京国際映画祭 作品情報 <https://2011.tiff-jp.net/ja/lineup/works.php?id=25>

作品：映画『最強のふたり』（2011年、監督エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ）

© 2026 FilmEdu AI ／ 本資料はAIを活用して作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家による監修ではありません。授業での使用可否・場面選択・学年の適否は担当教員の判断によります。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理（教育機関向けライセンス等）が必要になる場合があります。内容の誤りにお気づきの際はお問い合わせよりご連絡ください。